

第Ⅳ章 総 括

第 1 節 旧石器時代

Ⅸ層は、2区からナイフ形石器が1点、石核が1点、剥片が数点出土した。

アワオコシ層（Ⅹ層）の上層の出土であることや、出土したナイフ形石器（No.1）の形状が永迫第1遺跡第2地点Ⅸ層で確認された同器種に形状が類似することから、「10段階編年」における第3段階に相当する。宮崎市では高岡町高野原遺跡第4地点、同第5地点第Ⅲ文化層から確認されており、本遺跡の出土は上ノ原遺跡に続く出土例となった。

出土地点は勾配の激しい斜面地であるため、原位置ではなく斜面の流下中に混入・埋没した可能性が高い。出土点数は僅かであるため、石器組成等、石器群の詳細は不明であるが、調査そのものが少ないAT下位について、更なる注意を促す事例となった。

Ⅵ・Ⅶ層は、2区から礫群3基とナイフ形石器、角錐状石器、スクレイパー、石核、剥片等が、3区から礫群1基とナイフ形石器、スクレイパー、石核、剥片等が出土した。

検出した礫群は立神の分類では全てC類（礫が散在しするがまとまりの認められるもの）に属する。しかし礫の分布は、2区が2～3mの範囲に40個以内の礫が散在する2区の3基に比べ、3区は約140㎡の範囲に764個の礫が4つの集中区を伴って分布する。こうした大規模な礫群は狸谷型ナイフ形石器に伴う傾向がある。周辺では長藺原遺跡や清武上猪ノ原遺跡第5地区第Ⅱ文化層などでも確認例があるが、本資料の規模はそれらをはるかに超える。構成礫のうち、砂岩とその他の石材は近隣の川原や礫層で容易に採取できるが、総重量48kgに及ぶ尾鈴山溶結凝灰岩は、一ツ瀬川下流域から採取されたと考えるのが妥当であろう。一方、2区で検出された3基の礫群に尾鈴山溶結凝灰岩が認められなかったことも特徴である。

出土遺物の中で注目すべきは、11～16の、横長剥片を目的とした石核の存在である。これらは瀬戸内技法による翼状剥片石核と考えられる。12・13は翼状剥片同士の接合資料であり、翼状剥片石核を連続的に作出したことを示している。瀬戸内技法には第1～第3の工程が想定されるが、本遺跡の特徴を挙げると以下のとおりである。

- ①盤状剥片石核は存在しない
- ②翼状剥片石核は複数出土するが、接合資料は1点のみである
- ③翼状剥片石核は作業面長が短いため、素材剥片は小さく幅狭である
- ④製品は5のみであり、翼状剥片を伴わない

以上の点から、遺跡内で第1工程を行った痕跡は確認されず、第2工程も資料に乏しいと言える。近隣では、上ノ原遺跡より国府型ナイフ形石器が一定数出土する。本遺跡の出土例は、製品だけでなく剥離技術の伝播を示す資料と言える。

Ⅵ・Ⅶ層出土の石器群は、「10段階編年」における5期に相当する。この時期は瀬戸内技法、狸谷型ナイフ形石器、剥片尖頭器等の時期にあたり、宮崎県央部では上ノ原遺跡、長藺原遺跡、東畦原第3遺跡第Ⅲ文化層をはじめ、多くの出土事例が存在する。ただし本遺跡の2区と3区では、石器群や礫群について、以下の違いが存在する。

2区：翼状剥片石核を含む石器群、尾鈴山溶結凝灰岩を含まない小規模の礫群

3区：狸谷型ナイフ形石器を含む石器群、尾鈴山溶結凝灰岩を主体とする広範な礫群

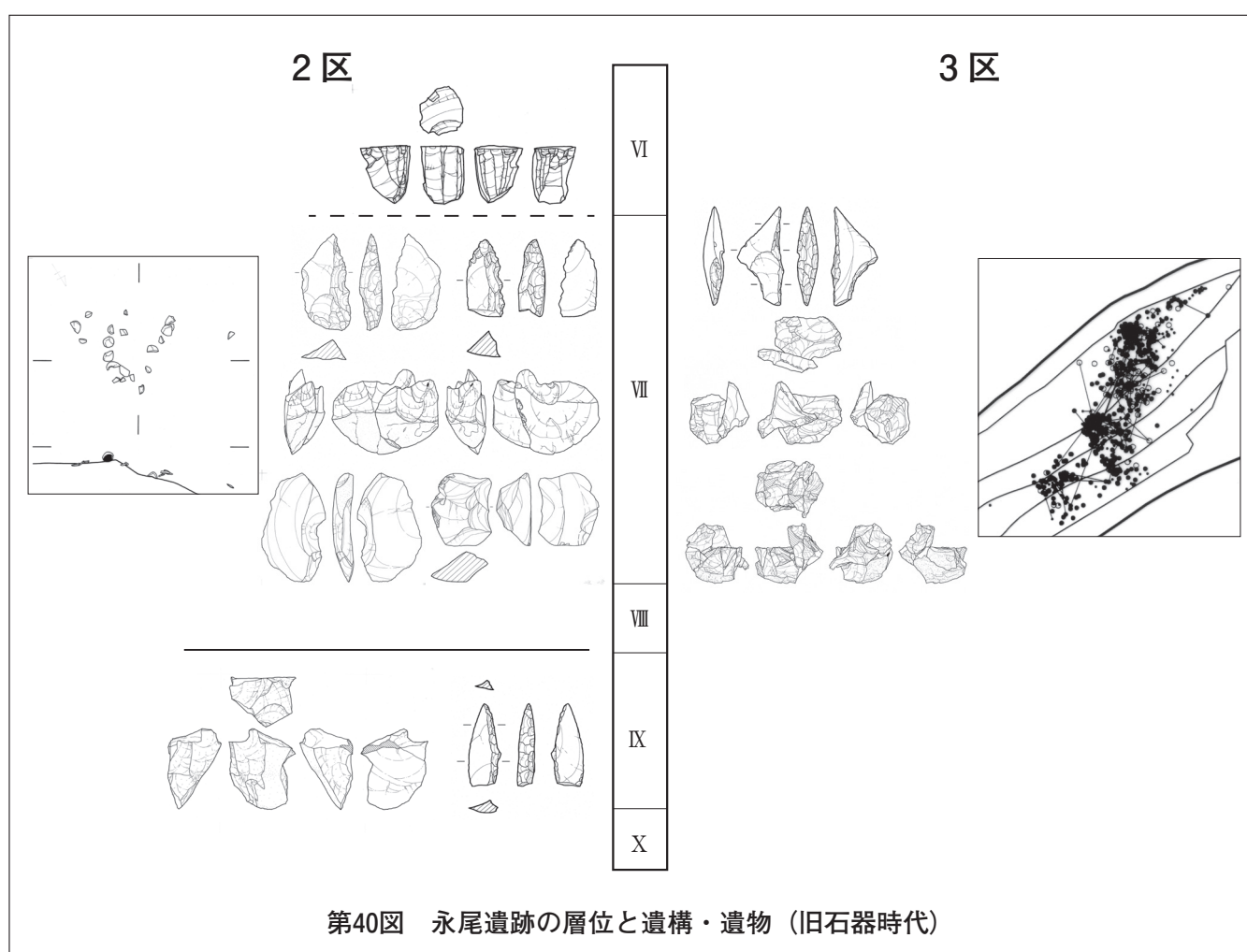
このように、同じ台地上で、異なる様相をもつ集団が、2区と3区に分かれて分布することが確認できた。これは、5期で括られた石器群に前後関係が存在する可能性を示唆している。

「10段階編年」、特にAT降灰後の4～6期のあり方は、近年提唱者らによる再考も行われており、本資料の様相はそれを知る手がかりとなろう。

このほか、2区からは船野型細石刃核の残核が出土した。円錐形を呈するため、「10段階編年」では8期にあたる。旧石器時代終末期の遺物は、仲間原・船野台地では多くの遺跡から確認されているが、本遺跡からは1点の出土のみに留まった。

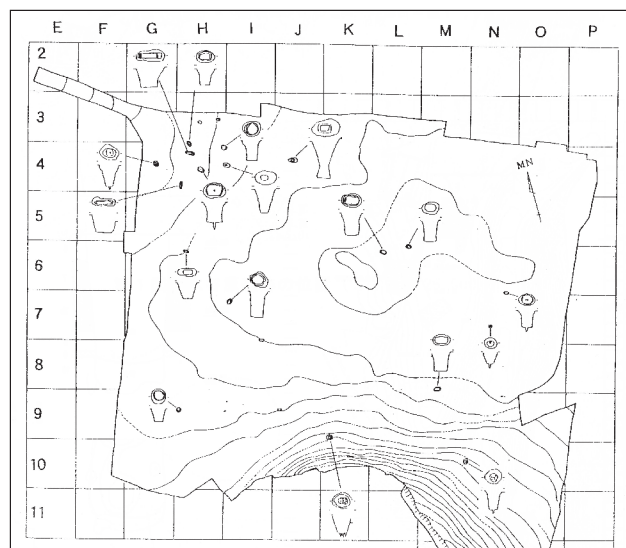
第2節 縄文時代

陥し穴状遺構は、2区1基（SC1）、3区1基（SC3）、5区3基（SC4～6）の5基が検出された。SC4～6の3基は深さ1.6mを超え、上部がロート状に窄まり、以下長方形のプランのまま底面まで垂直に掘り下げられる形状が共通する。対してSC3は、上面プランが不定形であり、正方形のプランとして垂直に掘り下げられるなど、異なる点が認められる。またSC1は上面プランが不定形であり、斜面地に構築したためか、掘り込みに段が設けられ、底面付近で一

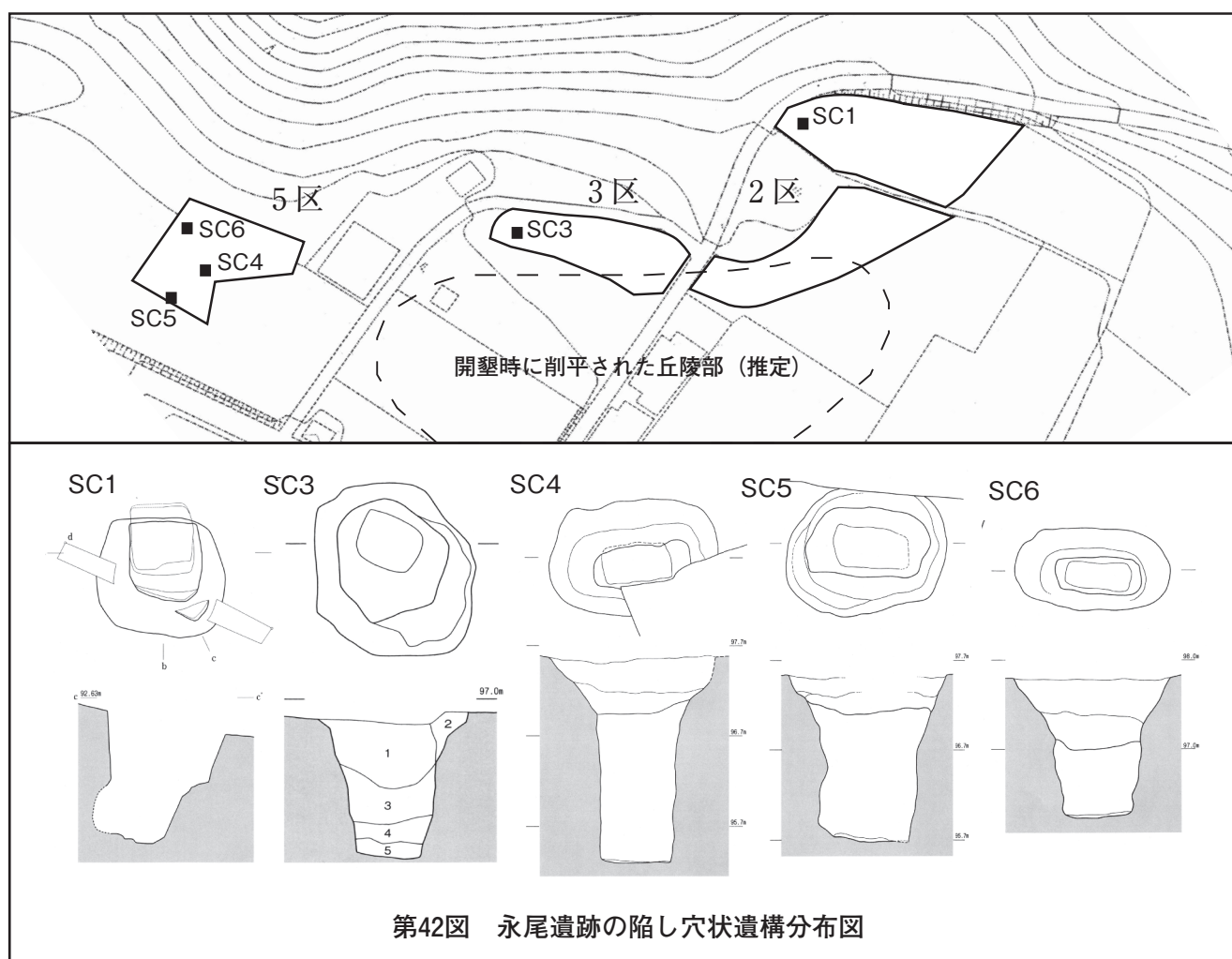


部オーバーハングする。なお、逆茂木を伴うものは皆無であった。

宮崎県内では、2004年の時点で71遺跡345基の陥し穴状遺構が報告されている。近隣の事例として、18基検出された別府原遺跡と比較したい（第41図）。まず形態であるが、別府原遺跡の陥し穴状遺構はロート部と掘り込み部に分かれるものが多いが断面形には幅があり、永尾遺跡は画一性が高い。ただし、SC1のようなオーバーハングするものは見られない。また、逆茂木痕（底面ピット）を伴うものが少ないことは類似する。次に立地であるが、別府原遺跡も調査区内に丘陵と斜面があり、陥し穴状遺構は、①丘陵上、②斜面、③丘陵裾の平坦地に分布し、③に密集する傾向にある。本遺跡は、丘陵が削平されているため①の存在は確認できないが、②はSC1、SC3に、③はSC4～6にあたる。③に密集する傾向は、別府原遺跡と同じである。



第41図 別府原遺跡の陥し穴状遺構分布図



第42図 永尾遺跡の陥し穴状遺構分布図

時期について、別府原遺跡は旧石器時代終末期とある。本遺跡の検出面はⅥ層上面であった。故に小林降下軽石の降灰からⅤ層が形成される前、旧石器時代終末期～縄文時代早期前葉の間と推定される。分類上縄文時代の遺構に含めたが、旧石器時代に遡る可能性があることを記しておく。

このほか、2区から焼土を有する土坑が1基（SC2）、3区から集石遺構が2基（SI1・2）検出された。このうち集石遺構は、構成礫が10個以下と集石遺構の中ではきわめて小規模な事例と言える。近接する別府原遺跡は、永尾遺跡と同時期でありながら炉穴が307基検出されているが、永尾遺跡では、別府原遺跡ほど大規模かつ長期的な居住は行われなかったと考えられる。それは、別府原遺跡が南への斜面地であるのに対し、本遺跡が北への斜面地であるという地形の違いも大きく影響したのであろう。

出土土器の主体は早期前葉の別府原式土器であり、貝殻腹縁刺突を行わないものの割合が高い点も含めて、標識遺跡である別府原遺跡と共通する。石鏃は全体で4点とごく僅かであり、石器群も貧弱である。その中、2区の下段西側は磨石・石皿の集中を見ることができ、比較的傾斜が緩やかな2区北側西部では、比較的安定した集落が営まれたと推測される。

第3節 縄文時代以降

縄文時代以降の遺物は、3区から包含層が確認され、少量の遺物が確認された程度であり遺構はない。他の調査区では包含層すら確認されておらず、詳細は不明である。ただし60の染付碗は、佐土原城跡第8次調査にて酷似した遺物（No.5）が確認されている。この碗は宮崎平野でたびたび確認されるが、現時点では製作地、年代共に不明である。本出土例は、その拡散を示す事例である。

（参考文献）

松尾有年 2004「宮崎県のおとし穴状遺構について」

『九州における縄文時代のおとし穴状遺構』九州縄文研究会

秋成雅博 2005「宮崎10段階編年の概要」『九州旧石器』第9号 九州旧石器文化研究会

立神勇志 2005「南九州の礫群」『九州旧石器』第9号 九州旧石器文化研究会

秋成雅博 2013「宮崎県における瀬戸内技法の様相」『九州旧石器』第17号 九州旧石器文化研究会

松本 茂 2014「宮崎の旧石器時代－東九州自動車道建設に伴う発掘調査成果から」宮崎県文化講座発表資料

秋成雅博 2014「宮崎平野部の遺跡群」『九州旧石器』第18号 九州旧石器文化研究会

宮崎市教育委員会2015「佐土原城跡（第8次調査）」宮崎市文化財調査報告書 第107号